海を渡った「石見焼」
その歴史と販路

阿部志朗

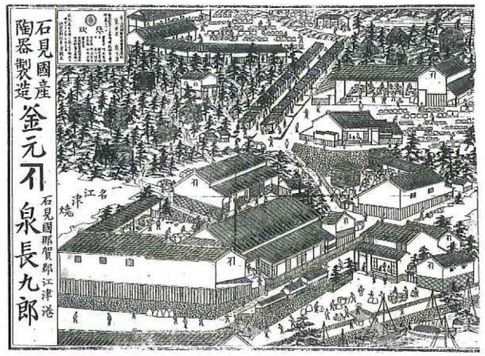

図2 明治中期の石見焼の窯
石見国商工便覧より

図1 北海道松前町で使われる石見焼

「石見焼」というやきものがある。「いわみやき」と読むその名が示すとおり、世界遺産石見銀山がある島根県大田市から隣の江津市にかけての、まさに旧石見銀山領内の地域で江戸時代末期に突如として作られ始めた。

陶土は、大田市から益田市にかけての島根県西部・石見地方の沿岸部に細長く堆積する「都野津層」という地元産の粘土である。普通、陶器に使われる陶土は1100℃～1200℃で焼かれるが、この粘土は陶器としては高温の1300℃近くにならないと焼き固まらない。釉薬には島根県東部の宍道湖南岸で採れる「来待石」という凝灰岩質の岩の粉が使われる。これまた1300℃の高温で赤茶色に発色し、ガラス質を含んだ光沢のある表面になる。この陶土と釉薬のおかげで、石見焼は堅く寒さや塩に強い陶器という評判を得て、日本海沿岸の寒冷地に広まった（図1）。

江戸末期から、水甕、蓋つきの壷、片口、こね鉢そしてすり鉢などの「粗陶器」と総称される日用品が一貫して作られてきた。赤茶色の釉薬の「赤もの」だけでなく透明釉の「白もの」もあり、丸い製品が多いことから職人は「丸者師」とも呼ばれた。現在、石見焼は国の伝統的工芸品の一つに指定されているが、今でも普段使いの器が中心。伝統工芸士たちは「先生」と呼ばれるのを好まず「職人」を自称する。全く無骨なやきものである。

石見焼の最初の全盛期は明治・大正期。同じ西日本の備前焼、唐津焼、萩焼など、すでに古くから登場し、江戸時代には各藩の専売品として名を馳せていた名だたる陶器産地が、幕藩体制の崩壊で停滞、没落あるいは海外向けの高級品の生産へとシフトしていく中で、後進の石見焼は国内向けの日用品の作陶にこだわり続け、生産を伸ばし販路を広げた。まさに「すき間産業」としての当時の成長産業であった。

文献によると、明治時代には石見地方全体で130を超える窯（工場）があったと伝わる。明治中期の石見地方の商工業を伝える銅版画集『石見国商工便覧』には、多くの職人が流れ作業で大量の製品、とくに当時の主力製品であった三斗～五斗サイズの「はんど（はんどう）」と呼ばれた水甕を作る窯の様子を描いた版画絵が何枚も残っている。「職場」と呼ばれた作業場やそれを焼く大きな「登り窯」を持つ窯の多くは、日本海に近い場所に作られた（図2）。製品は次から次へと「北前船」で各地に運ばれた。

浜田市に昔あった廻船問屋の記録帳『諸国御客船帳』から「焼物」売買の記載を抜き出すと、明治以降「下り」船（北陸・東北・北海道方面）の「買積」（購入し船に積み込む）が増加する。凍害や塩害に強いという評判が、北前船の船頭の間に広まっていたのであろう。また、船での輸送に都合のよい「菰包み」と呼ばれる独特の梱包方法も石見焼の特徴であった。大きな甕の中に小型の甕、さらに壷、こね鉢、すり鉢と、菰に包みながら入れ子状に梱包し底を上にして船に積んだ。この様子も先の明治の銅版画に描かれている。こうして石見焼は多種類の製品が大量に船で日本海沿岸に流通したのである。

運がよければ石見焼の底面に「石見焼□製」（□には各窯の商標が入る）の刻印が見つかる。これは1903（明治36）年に石見焼陶器製造業組合が発足して以後、戦前にかけて作られたおもに遠方に出荷する製品に刻まれた印である。これを手がかりに戦前までの石見焼の流通圏を調べたところ、少なくとも北はロシア・サハリン州、南は鹿児島県までのおもに日本海沿岸、鉄道の開通の遅れた豊後水道両岸、さらに韓国・鬱陵島までの広い範囲に及んでいることが明らかになった（図3）。刻印は甕やこね鉢の底に押されたものが多いが、能登半島の資料館の古いすり鉢にも石見焼の刻印があることがわかった（図4）。

戦後、鉄道輸送中心の時代になっても、石見焼の隆盛はしばらく続いた。とくに水道が普及するまでの台所の水甕、プラスチックが普及するまでの味噌甕、塩壷、そして堅くて丈夫なすり鉢などの製品の販路は、日本海沿岸地域から近畿、東海、関東へと広がった。刻印はなくても、写真をみせればある程度より上の年齢の方なら「ああ、うちにもあったよ」と必ず同じレスポンスが返ってくる。

それが「石見焼」である。

今年、世界遺産になった長崎の〈軍艦島〉の日本最古の鉄筋コンクリートアパートの廃墟の中に、石見焼の甕がある、という知らせが最近届いた。再び脚光を浴びるかもしれない石見焼。しかし、このやきものはこれからも変わらず、無骨な日用品であるに違いない。

阿部志朗（あべしろう）
1965年島根県生まれ。
広島大学大学院学校教育研究科修了。
1990年より島根県公立高校の教員を務め、現在、島根県立浜田高等学校勤務。おもに地理の授業を担当。
地域教材の発掘を心がけ、島根の窯業製品の流通圏研究はその一環。
日本地理学会会員。
人文地理学会会員。日本民具学会会員

図3 刻印の押された石見焼が現存する資料館・博物館など

図4 石川県珠洲市で使われていた明治期のすり鉢とその刻印
珠洲市立珠洲焼資料館蔵